

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月24日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520067

研究課題名（和文） モニュメントの宗教学：一地方都市における「記憶と歴史」をめぐる基礎的調査研究

研究課題名（英文） Religious Monuments : Basic Research Study on Collective Memory And History in a Japanese Local City

研究代表者

関 一敏 (SEKI KAZUTOSI)

九州大学・人間環境学研究院・教授

研究者番号：50179321

研究成果の概要（和文）：

この研究は福岡市をフィールドとして、大社寺から小祠・お堂等の小さな宗教施設、さらには記念碑・市街アート等の世俗的オブジェをふくむモニュメント群の網羅的調査研究である。市制施行時(明治22年)の版図を対象地域に限定し、775件のデータを集積した。これをもとにモニュメントの類型化を図り、①宗教施設、②哀悼と厄災、③記念と顕彰、④分節と希望の結果を得た。①を宗教史の極に、③④を世俗史の極にそれぞれ配し、②は両域にまたがる構図である。

研究成果の概要（英文）：

This study is aimed at an exhaustive research on monuments in a Japanese local city Fukuoka, including historical Buddhist temples & Shinto shrines, nameless small street statues, as well as secular arts in open air. On the basis of the collected 775 data, the possible typology of city monuments is: ①religious monuments ②monuments of mourning & disaster ③monuments of commemoration & honor ④monuments of articulation & hope.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教学全般、日常性、モニュメント、記憶、都市空間

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 研究動向

モニュメントに関する研究は、主として国家的施設とその分枝(忠魂碑・慰霊塔)の思想的な研究か、地方の小さな神仏(小祠・生祠)の民俗学的研究か、都市空間内のオブジェと建造物の建築史的研究かである。本プロジェ

クトは一地方都市を定点として、これらすべてを包摂する視角(「モニュメント」)から都市の記憶装置のもつアメーバ状の空間形成と、濃淡をもつ歴史意識の被覆的な沈殿過程を対象にしており、この点で直接のヒントは次のふたつにある。

史蹟・文化財の近代史：80年代からのナショナルリズムと国民国家形成史研究の線上に、

羽賀祥二(史蹟論)や高木博志(文化財)らの文化史的な仕事がある。とくにこの分野の嚆矢というべき羽賀の郷土愛と郷土史の構築過程の史的研究には、史料操作の方法とともに学ぶところが多いが、焦点化される史蹟とまで云えないマイクロなモニュメント群のもつ、都市空間内の場の形成力はこれとは別の探究を必要としている。

モノと記憶の社会学：モノのはらむ社会的な力については 70 年代のボードリヤールから 90 年代のアパデュライにいたる厚い蓄積がある。しかし直接的なヒントは 20 世紀前半のデュルケム学派にある。すなわち民俗世界の聖者・聖地の伝承群から岩の聖性を析出したエルツと、聖地イェルサレムの史蹟表象の史の変遷をもとに「集合記憶」のダイナミズム(収束・併存・細分化)を描出したアルバクスであり、ともに「社会的記憶の支柱」としてのモノの見方に共通性がある。

## (2) 着想の経緯

代表者は、70 年代からの祭り、90 年代の呪術の調査研究をとおして、自己言及的な宗教現象(近代キリスト教モデルによる教団型宗教)は、その裾野に広大な日常世界とそこに伏在するかすかな宗教性の層をかかえて成立していることに注目した。前回の「日常性の宗教学：一地方都市における幸福の探求をめぐる調査研究」(基盤 C、2007-08)は、この日常生活に隣接・埋没した現象を対象化する試みだった。ここでは主として聞き書きと同行観察による、日常的な生きる技法の析出を心がけたのだが、その行程で、そうした日常を支える都市的環境そのものを資料化し記述する必要性に直面した。すなわち「生きる技法」あるいは「幸福の探求」から、「生きられた場」あるいは「幸福な場所」への重心移動であり、そうした場所性をつくる記憶装置としてのモニュメントへの注目である。そのさい、都市の生活環境と日常性研究にそれぞれ蓄積の厚い、人類学と民俗学的方法的蓄積を宗教学へと回収することが課題である。

## 2. 研究の目的

本研究では、都市空間におけるモニュメントに焦点をしばり、モノ媒体に託された「記憶と歴史」の仕組みの実証的な解明を試みた。ここでモニュメントとは、歴史的な社寺仏閣から、路傍の小祠・お堂・板碑等の小さな宗教施設、さらには記念碑・立像・市街アートといった世俗的なオブジェをゆるやかに含んでいる。一地方都市(福岡)をフィールドとして、都市空間に歴史的深度を与えつつも通常は意識にのぼることの少ない対象の学問的資料化の試みであり、方法的には、人類学的視角(飯嶋)と民俗学的視角(重信)との協働

を図る。非日常ではなく日常を、行為と言葉ではなくモノを、集団ではなく都市そのものを、ローカルから問う基礎的研究によって、より豊かな実証性と柔軟性をあわせもつ宗教(史)学の地平を開くことが目的である。

## 3. 研究の方法

### (1) 場としての都会

福岡市をフィールドとして以下研究を試みる。まず、都市の日常をつくる結節点として「モニュメント」に注目し、主題として「歴史と記憶・場所性・都市的ローカリティ」をおく。と同時にそうした日常が祀り・イベント・集会によって分節され、場所的記憶の反復的再生産によって賦活され輪郭を与えられる過程に注目する。とくに福岡市の場合、町人町からなる博多部と武家町としての福岡部の「対抗と親和」のバランスがあり、それぞれに固有の群小モニュメントの配置を分明したうえで、両地区を「福岡」へと対抗的に親和させる統合ベクトルをもつ大規模なモニュメント(史的モニュメントとしての寺社、近代モニュメントとして改装中の博多駅や移転中の九州大学等)を視野に含む。

### (2) 方法的な模索

モノに込められた都市民の記憶と歴史をめぐる本研究の課題は、第一に基礎的なデータの集積方法(媒体そのものの記録、出来事や人物をめぐる記憶の聞き書き、史実の探索、祀り手・担い手の分布等)にあり、第二にその記述方法(地図表象、併存する複数の記憶や重層する複数の時間意識の表象等)にある。これらはいずれも、きわめて現場的な記録技術の側面と、その背後にある本質的な学問的課題の側面とをあわせもっており、にわかには解決できることを楽観していない。

A) 資料性。一地方都市・福岡市の現時点でのモニュメント配置を網羅的にデータ化する。福岡市を二分する博多部と福岡部のさらに旧地区にいったん対象を限定し、2009 年現在の全データの集積を第一のねらいとする。資料的に不明なモニュメントの存在が多数予測されるが、その場合は位置・形状の記録だけを残す。そのこと自体が時代的な変遷と記憶の消失(あるいは伏在化)をあらわにし、被覆的・波動的な社会記憶の累積・沈殿・変容の動きを示すからである。

B) 方法性。本研究の方法的課題は、a) 空間と場所、b) 時間と歴史、c) 支え手たち、d) 類型化、の四項に分けることができる。このうち a) b) c) は記述技法がそのまま探究課題とかさなる。すなわち、a) モニュメントを媒介とする都市空間の分節過程、b) 出来

事・記憶・現在という三層の時間意識の重層過程、c)担い手たち(世話人・支持者)とその地域分布、の三点である。これについては集積した全データから複数のパターン[d]]を抽出し、そのそれぞれの典型例を集中的に調査するやり方を考えた。開始当初の予測では三類型を念頭に置いていた。調査後の類型案については次の4節に述べる。

- ①史的モニュメント 例) 社寺仏閣
- ②記念と顕彰のモニュメント 例) 記念碑
- ③哀悼と厄災のモニュメント 例) 供養塔

#### 4. 研究成果

本プロジェクトの二本柱が「資料」と「方法(そして理論)」にあり、うち資料化に時間と労力の大部分が費やされることは見込んでいた。適正な資料化の手法それ自体を調査の進行とともに練り上げ、練り直す必要があり、その正否とその手法からこぼれ落ちる事例の配置に成果の大部分がかかっているからである。以下、不十分ながらその経緯と得られた知見を記す。

##### (1)対象の限定

データ収集には責任者・分担者・連携者に加えて院生6名を動員した。まず足元からの意を込めて本拠地・九大のある東区から歩き始めたが、初年度で有意な区切り方の必要を痛感し、福岡市を二分する博多部(主として商人・町人区域)と福岡部(主として武士・サラリーマン区域)の限定的な調査に切りかえた。明治22年の市制施行時の福岡市域(当時人口約5万人)に区切ること。すなわち現在の博多区と中央区のさらに旧市街地域を対象を限定した。

収集データの総数は775件。うち、博多区479、中央区206、東区90である。

このためその後の市の波状的な拡大ともなうモニュメントの生成と移動の主題は縮小を余儀なくされたが、以下については網羅的にデータ化しえた。1)都会性の表出としての出自不明のモニュメント群(寺社・小祠周辺に蟠集する群小モニュメント、私的来歴と思われる単立モニュメント等)。2)文字媒体による記憶の一局面の固定化としての来歴の文字化されたモニュメント群(教育委員会や町おこし集団による解説と記憶表象)。

##### (2)データ主要項目

最終的には、以下の五項目である。①名称、②所在地、③概要、④境内祠堂等、④記念設備、⑤碑文等。

以下、簡略な説明を加える。①自己言及的なモニュメント(寺社、碑文、街路アート等)

以外に、判読不能のモノとしてある多数の事例は、通称もしくは形状から判断して記載。③概要には、公的な説明(教育委員会、NPO、町内会等)、新旧書籍による説明を出典とともに記載した。語られる由来の聞き書きは十分には行ないえなかった。④⑤大小の社寺には境内に祠堂・碑・標柱・石等が複数置かれていることが多い。

たとえば、山笠で知られる博多総鎮守・櫛田神社(博多区上川端町)には、④14の祠堂と⑤56におよぶ記念設備(狛犬、標柱、像、碑等と説明板)があり、④祠堂のうち12にはさらに鳥居・灯籠等が付設されている。それらすべての碑文の記録は不可能であり、主だったものに限った。加えて境内外にも鳥居・灯籠・浜宮等があり、マチバとの境界を截然と区切らない工夫、被覆的にゆるやかに重なりあう面化の仕組みがみられる。

これに対して、大寺院をあげると、栄西創建の聖福寺(博多区御供所町)には、④八幡社以下4つの祠堂と、⑤9の記念設備(標柱・碑)があり、弘法大師密教東漸祈願の地とされる東長寺(同上)には④石仏98体ほか祠堂等6件、⑤5件を数える。大社寺ではなくとも、葛城地蔵(博多区上呉服町)には④地蔵2体と⑤板碑ほか6件の設備をとまう。

こうして寺社祠堂等を大小の差なく並列的に記録することは、量的データとしてなお改良の余地を感ずるものの、界限との質的な関係性をあらたに問うための基礎資料の役目を果たしうると考える。たとえば境内と界限との境界線の強さの比較は次の2点で測りうる。ひとつは境内から枝のように延びた付属施設(鳥居・灯籠等)の有無とその機能、もうひとつは時代を違えながら境内に併設されて行く祠堂・記念設備の増殖過程とその頻度。いずれの点でも、神社は寺院よりも融通性が高い傾向にある。

##### (3)得られた知見

###### A)不明のモニュメント・移動するモニュメント・消失するモニュメント

調査初期から記憶と記録の風化したモニュメント群の存在は予測していた。碑・小祠・アートの作品等々の細小モニュメント群には来歴の定かでないモノが多くあって、そもそもそれを何と呼んだらよいか分からぬことすらある。資料としては多角的な写真撮影と場所の同定が第一であり、2009-2011現在の正確な記録を心がけるほかはない。

不明になる大きな理由は、第一に波状的に市域をおそう区画整理や再開発の波である。とくに常態が路傍にある細小モニュメント(稲荷・地蔵の小祠や堂等)はその余波を受けて、なかでも祀り手の明確でないも

のは近隣のより大きな宗教施設へと運ばれることが多い。前述・櫛田神社の多数の付属施設は、由来の分かる石堂神社(1909年、境内の宗像神社と合祀、中石堂町から遷座)や、金比羅宮(1910年、市内電車開通にともない片土居町から遷座)等々を別とすれば、そうした都市の発展と変容を背景とする移動物と推測される。加えて、明治初頭の神仏分離や明治末の神社合祀等の宗教政策が、分離と結合というふたつの力を大小すべての寺社に負荷したことを考えると、市域拡大を重ねてきた120年間の福岡市の常に動きを止めないアメーバ状の歴史を想定することができる。

ここで2点に注目したい。第一に移動するモニュメントの行き先は、地藏・観音等の石仏である場合以外は神社に蝟集する傾向がある。潜在化した記憶の担い手としてのモノの移動が強い磁場へと引き寄せられるのであり(アルバクスのいう集合記憶の収束化)、境界の住人たちとのつきあい方が寺社では異なるようである。第二に、不明となったモニュメントをそのまま温存する傾向が強く見られる。移転を余儀なくされる場合も、廃棄・遺棄の選択肢はないかのようであり、かつて祀り手のあったモニュメント群として詳細不明のまま累積されて行く。

例外的に消失するモニュメントは大災害時に多く見られる。地震・颱風の少ないマチではあるが、福岡大空襲(1945.6.19)は旧市街部とその周辺を焼尽した。多くの施設は復興したが、蘇生することなく消失した群小モニュメントについては正確な記録がない。

## B) 記憶の重層化

同一のモニュメントが歴史の変移とともに新たな意義を付加することがある。好例は川端飢人地藏(博多区中洲)で、元来は享保の大飢饉(1723年)の死者供養の地藏であったが、戦後は戦死者・戦災死者供養を兼ねる。8月23,24日の施餓鬼供養をはじめ、祀り手は博多川をはさんで対岸の上川端通地藏組合である。こうした、戦死者をふくむ死者の記憶のモニュメント群は、大浜流灌頂で知られる餓死靈魂供養塔(博多区大博町)をはじめ博多部に多い。より厚い地域の聞き書きは、さらに公的な性格の薄いさまざまな記憶(個人や家族や親族の、また地域のそれ)が、ひとつのモニュメントに重層化されていることを明らかにしうるだろう。

## C) モニュメント類型の再構築

3(2)Bに挙げた三類型は、①史的モニュメント(社寺仏閣)、②記念と顕彰のモニュメント(記念碑)、③哀悼と厄災のモニュメント(供養塔)である。775件のデータを通覧して訂正と増広がある。

### a) 訂正すべき点

記念と顕彰、哀悼と厄災はそれぞれ社会的な機能を意味するが、史的という用語はどのタイプにも妥当する曖昧さをもっている。また社寺仏閣の場合、その宗教性を無視することもできない。よって1.として「宗教史的モニュメント」を、2.として「世俗史的モニュメント」を大分類する。旧分類で①史的としたものは前者に、また旧分類で②「記念と顕彰」は後者にそれぞれふくまれる。旧分類で③とした「哀悼と厄災」は宗教史と世俗史の双方にまたがる横断項目である。

### b) 増広すべき点

予想した三類型(史的、記念と顕彰、哀悼と厄災)にも、前項に述べた新分類にも回収しきれない事例群がある。博多部では、環境浄化の塔(中洲)、彫刻・那の津幻想(下川端町)、ガラス時計、アシカのモニュメント(ともに築港本町)と限られているが、福岡部のとくに天神地区には、アート系のほか商業モニュメントや機能の定めがたいモノが多い。

うちアート系は、市の「彫刻のあるまちづくり」プロジェクト(1983-)25体をはじめ(上記「那の津幻想」もそのひとつ)、主として彫刻・レリーフ等の造形作品である。また商業系には、天神ツインビル前時計塔、新天町メルヘンチャイム、天神地下街かっぱの泉、福岡三越のライオン像など、商業施設に付設されたモニュメント群がある。

これらに特徴的なのは、アートであれ商業施設であれ、たんなる装飾でもなく、たんなる商業用でもない、もうひとつ別の機能をもつ点である。いずれも歴史的な建造物やモニュメントの希薄な場所に立てられ、人工的な空間に句読点を打つはたらきが見られる。ある出来事の記憶や顕彰・哀悼ではなく、そのモノ自体が場所に起伏と濃淡を与え、のっぺらな空間を分節する。これらがまちあわせの目印になりうるのは、そのためである。よってこれを④「分節」のモニュメントとして類型に加えねばならない。大分類では世俗史にふくまれよう。

ただ、これでもまだ不十分な事例がある。天神愛眼ビルのがね地藏や、飲酒運転撲滅を誓うモニュメント、出会いの鐘等は、場所性の構築に収まらない。アート系、商業系ともに共通するもうひとつの側面として、夢・願い・希望の系列がみられ、これは②顕彰や③哀悼とは逆の未来に向かう時間のベクトルをはらんでいる。よって、場所性の分節にこれをくわえ、④「分節と希望」として一類型と考えたい。

以上をまとめると次である。

## 1. 宗教史的モニュメント

- ①宗教施設
- ②哀悼と厄災[1. と2. にまたがる]
- 2. 世俗史的モニュメント
- ②哀悼と厄災[1. と2. にまたがる]
- ③記念と顕彰
- ④分節と希望

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 飯嶋秀治「宗教の教育と伝承ーペイトソンのメタローグを手がかりにして」『宗教研究』369号、29-56、査読有
- ② 関一敏「集合記憶をめぐる覚書」『記憶ー共生社会学論叢v』1-5、2010年、査読
- ③ 飯嶋秀治「茂道への道のり」『茂道ー人間共生論叢』5-33、2010年、査読無

[学会発表] (計11件)

- ① 関一敏「否定の宗教学」日本宗教学会、2011年9月3日、関西学院大学
- ② 関一敏「「無形民俗文化財」という思想と現実ー福岡県民俗文化財の審議に携わって」中日韓非物質文化保存比較学術討論会(招待講演)、2011年8月2日、中山大学(中国広州市)
- ③ 飯嶋秀治「保存と観光の間で」中日韓非物質文化保存比較学術討論会(招待講演)、2011年8月2日、中山大学(中国広州市)
- ④ 関一敏「偶像崇拜禁止の宗教史的意味」西日本宗教学会、2011年3月31日、鹿児島大学

[図書] (計5件)

- ① 関一敏、飯嶋秀治ほか『福岡市史民俗篇1 春夏秋冬・起居往来』800頁、2012年、福岡市
- ② 飯嶋秀治(共編)『支援のフィールドワーク』264頁、2011年、世界思想社
- ③ 関一敏・飯嶋秀治他(共著)『福の民』334頁、2010年、福岡市

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

関一敏 (SEKI KAZUTOSHI)  
九州大学・人間環境学研究院・教授  
研究者番号：50179321

##### (2) 研究分担者

飯嶋秀治 (IIJIMA SHUJI)  
九州大学・人間環境学研究院・准教授  
研究者番号：67452728

##### (3) 連携研究者

重信幸彦 (SHIGENOBU YUKIHIKO)  
北九州市立大学・基盤研究センター・教授  
研究者番号：70254612